

信じて待つ

「ハバクク書」2章1～5節を朗読。

3節「この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそければ待っておれ。それは必ず臨む。滞りはしない。」

ハバクク書は預言者ハバククという人が記した預言の書です。ハバククの生きた時代は、イスラエル、ユダが滅亡しようとする直前のことです。彼の場合は、特に、ユダのエホヤキン王がバビロンのネブカデネザル王に捕らえられ、バビロンへ連れられて行かれる。そういう時代です。その当時のユダの国、イスラエルの人々の生活ぶりは、到底神の民と思えないような生き方をしていたのです。暴虐が地に満ちて、不正がはびこり、まことに世の末だ、と言わんばかりの様相を呈していました。それに対して、神様は何も言わない、何もしない。ハバククは大変神様に対して、不満があったわけです。「神様、どうしてこの民をいつまでも放っておくのでしょうか。なぜあなたは、何も言おうとしない、しようとするに任せておられるのでしょうか」と、1章に語られています。神様の答えを求めようというのです。その時、神様は、「大丈夫。私はその答えを用意しているから。丈高き民、カルデヤ人を興して、彼らに最後の決着をつけて下さる」と約束しておられます。

しかし、ハバククは、それでもなお、

神様は本当にしてくれるのだろうか。目の前の事態や事柄を見ていると、いよいよどうにも收拾がつかない事態になっているのではないか。そういうことを彼は考える。そして、神様に「じゃあ、どういうことをあなたはしようとされるのか。私はしっかりと見ておきたい」。そういう思いで、2章1節に、「わたしはわたしの見張所に立ち、物見やぐらに身を置き」とあります。これは、別に神様のなさるわざを高い所から見ているというわけではなく、比喻です。譬えの言葉で、神様の前に祈りつつ、待ち望むことです。見張所に立ち、物見やぐらに身を置く。言い換えますと、神様に向かって、神様の手のわざがどのようになされるか、私はしっかりと心をそこに向けて、見守っていきたい。そして神様はなんと答えられるか。それはどういう結果になるのか。

ですから、1節に、「望み見て、彼がわたしになんと語られるかを見、またわたしの訴えについてわたし自らなんと答えたらよかろうかを見よう」と。さて、神様はこれからなんと答えて下さるのか。「彼がわたしになんと語られるか」、彼というのは神様のことです。神様が私の語りかけに対して、なんと答えて下さるか。また、私の訴えについて、どう神様は返事をして下さるか。さらに、「わたし自らなんと答えたらよかろうか」と。言うならば、自分が神様に問いかけたその答えについて、どういうふうに私は説明すべきでしょうかということです。なお深く、神様に自分の心をどう伝えたらよいだろ

うか。そういう思いをもって、見張所に立って、神様の前に心静めて待ち望んでいたというのです。

その時、神様が答えられたのが、この2節以下です。「主はわたしに答えて言われた、『この幻を書き、これを板の上に明らかにし、走りながらも、これを読みうるようにせよ。』」この幻とは漠然とした言葉です。何を指しているのか定かではありません。けれども、神様のみ思い、神様が語って下さること、それらすべてのことを大きく括って幻という言葉で表現しています。一つ一つのどの言葉が幻であり、どれがそうでないという話ではなく、神様の思いが語られる事、それがどんなことであろうと、その一つ一つの神様の言葉、これが幻ということです。それを書き記して、常にそれを見ていく。「走りながらも、読みうるようにせよ」。どうして走らなければならないかと思いますが、いよいよ終末の時が近づいて、すべてのものが滅び去ろうとする時、まさにあのエジプトの奴隷となっていたイスラエルの民が、過越の日、彼らは腰をからげて、すぐに出発できるように、すべてを整えた上で種入れぬパンを食べ、そして過越の食事を済ませ、そそくさと出て行く。まさに、いろいろな時に、どんな風に神様が働いて下さるか、これはわからない。常に準備していく。備えていくということです。しかも、それは何日間かかけて、という悠長なことではなく、神様の約束の事が始まるならば、それは一気呵成に進んでいくということに他なりません。

あのエジプトから民が救い出された時もそうです。四百何十年、長きにわたって、民は待ち望んできました。神様にこの苦しみから救い出して下さいと祈り続けました。そしてモーセが立てられましたが、だからと言って、すぐに右から左へ、事は進まない。実に、忍耐の要ることでした。繰り返し、繰り返し、パロ王様と談判しますが、それも役に立たなかったのです。パロ王様の心を翻すことはできませんでした。その結果、神様がなさったのは、あの過越の出来事。エジプト中のすべての生き物の初子を滅ぼすと。神様が力をあらわされる。その神様のわざが始まった瞬間、一気に、怒涛のごとく、事態がガラッガラッと進んで行きます。神様のなさる事は、段階を踏みながら、人が考える手順を踏みながらではありません。これが済んだら次にこれ、これができたら次にこうなると、人は勝手にこういう風に進んでいくだろうと思いやすいのですが、決してそうはいきません。殊に、神様のわざは、突然のごとく起こります。そして一瞬の間にすべてのものが取り壊されていきます。

先頃、台風の影響で、各地に大変な被害が出ました。これとてもじわじわとやってきたものではありません。もう大丈夫かと思いきや、一気に降り始めた雨が大洪水を引き起こします。そして、「ここは何とかもてるのではないか」と思ったところが、一瞬の間に破壊される。体験者の話を聞きますと、「逃げる暇がありませんでした。とにかく、手当たり次第、何とか、と思って、気がついたら、助かっ

ていた」と。事はそういう風に進んで行くのです。ところが、人のすることは、なかなか進まない。手順を踏みながら、段階を経ながら、一つ一つやっていくものだと思っている。しかし、神様のわざは、一瞬にして進んで行きます。ですから、神様は、ここでいつでも幻を読むことができるように、しっかりと板に書き記しなさい。しかも、その幻は漠然とした、つかみどころのない幻としてではなく、一つ一つをしっかりと板に書き記した、具体的な言葉のごとく、それを信じること、それをしっかりと握っていけということです。走りながらも読むようにせよというのですから、何があってもその言葉を手放してはならない。その約束にしっかりとしがみついていく。これが神様のハバククに求められたことです。

そして、3節に「この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる」と。神様の言葉、この聖書を通して神様が約束して下さったすべての言葉、これは幻です。その一つ一つが細かく聖書には語られていますが、聖書全体を通して、神様が与えておられる約束は何でしょうか。それは私たちのこの地上の生涯だけがすべてではなくて、その先で永遠の御国の生涯に私たちが入ること。救いにあずかるとはその事です。私たちは、神様によって造られ、この世に命を与えられました。何だか自分の生涯というのは、この地上の生涯、八十年、九十年、長くても百年でしょうか、それですべてだと思っています。しかし、私たちに対する救いは、この世のものとしてではなくて、

永遠の御国の生涯に私たちを引き入れて下さるといふ神様の約束です。ですから、イエス様が私たちの罪の贖いとなって、十字架に命を捨てて下さった。それはただ私たちがこの地上で、日々の生活で、家内安全、無事息災、すべての事が事無く、順調に、幸せと思えるような人生を過ごして、「ああ、満足。これで私は思い残すことはない。はい、さようなら」で終りとする、この地上の旅路だけを良しとするのならば、イエス様の十字架の贖いは要りません。イエス様は何のためにこの世に来て、私たちのために死んで下さったのか。それは私たちを永遠の御国の生涯に移して下さるためです。私たちの救いはそこにあるのです。

ですから、今こうやってイエス様を信じて、救いにあずかっていますが、まだ救いは完成していません。私たちの救いの完成は、すべてのものが終る終末の時です。私たちが地上の生涯を終って、肉体を捨てて、そして「霊はこれを授けた神に帰る」と、まず神様の所へ帰ります。しばしの休息の時、眠りにつきます。そして、終りのラッパの鳴り響く時、言うならば、天も地もすべてのものが終る終末の時に、先に眠った私たちの魂は呼び覚まされて、すべてのものと共に、神様の前に立たせられる。そして、神様は小羊の血によって洗われた者である私たちを、黙示録に語られているように、永遠の御国の命の生涯に移して下さる。これが私たちの救いの完成です。だから、「この地上で問題なく、事無く、思うような、願うような人生を送る、それが救いであ

る、それが私たちの信仰の結果である」と言うならば、それはあまりにも小さい。そこには真の救いはありません。私たちが目指していることは永遠の御国の生涯に移していただくことです。その時を望み見て、今、この地上に置かれているのです。このハバククに神様が語られたあの幻、言うならば、聖書を通して神様が証しして下さる神様の約束。永遠の御国の民として、み前に立たせて下さるという約束です。

ところが、私たちはその事よりも、今、目の前の事ばかりに心と思いが囚われますから、日々、見ること、聞くこと、あれが心配、これは不安、これが困ったことになった、あれがどうなったと、日常茶飯の周囲の生活の事に心を囚われて、イエス様の救いにあずかったというけれども、何の役にも立たない。心配も不安も無くなるかと思いきや、救われたと言いつつも、毎日心配や思い煩いに満ちている、懐はなかなか暖まらない。信仰をしたって仕方がないではないかと。そんな不平や不満になっていくのは目的が違うからです。信仰の何たるかが違っているからです。

イエス様の救いにあずかった弟子たちや当時の救われた多くの人々が、様々な困難の中に置かれます。考えてみると、パウロもそうです。その当時のユダヤ人社会で優秀な人物として、将来を囑望され、期待された人物だったでしょう。彼はそのまま人生を行けば、この世では結構な地位や名誉を手にしたに違いない。

ところが、イエス様に出会った。それがまことに幸いであったと思いますが、考えてみたら気の毒なことです。彼はそこからイエス・キリストに仕える、新しい生涯へ入って行きます。しかし、彼の生涯をずっと振り返って見ると、ひと時として安心して休らぐ時はありません。次から次と戦いに戦い、様々な患難や苦難の中に遭遇します。もしそれがなければ、よほどこの世にあってゆったりした楽しい人生を彼は満喫したに違いない。ところが、彼はむしろ永遠の御国の生涯を望み見る者とされたことを喜んだのです。

私たちにも、今、この地上にあって、いろいろな問題に出会います。悩みや悲しみ、心配が離れません。そこで私たちが何を求めていくか。イエス様の救いにあずかって神の子供とされましたと言いつつも、私たちの現実、日常生活の中で、いろいろな問題に遭います。それは何のためにそうなるのか。いくつかの目的がありますが、その大切な一つは、悩みや悲しみ、苦しみを通して、私たちが身近に神様に触れる事、そして神様を深く知る者となることです。永遠の御国の生涯がただ単なる絵に描いた餅ではなく、現実に、今、私にとって、最も力ある望みとなっていく。そのための訓練の時なのです。

ですから、この地上にあってイエス様の救いにあずかりながらも、次から次と思いがけない問題や事柄の中に置かれる時、それは私たちをしてこの地上のことに心を囚われることなく、そこからさら

に永遠の御国を望み見る者へと、心と思いを新しくして下さる神様のみわざの一部分です。ですから、救いの最終目標地、到着地点、行きつくところはどこであるかを常に自覚していく。今こうしてこの世にあって、元気で神様の御声を聞き、その約束の言葉を心に抱いて生きる今でなければ、終りの時の望みをしっかり持つことができないからです。

神様は、このイスラエルの民にもそのことを求めました。3節「この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない」。幻、言うならば、神様の救いのご計画、聖書に約束された神様の一つ一つの約束は、すべてがそれぞれ定められた時に向かって、着実に事が進んでいる。「終りをさして急いでいる、それは偽りではない。もしおそれれば待つておれ」。大丈夫。まだ神様が約束を実行されないとするならば、その時を待てと言われるのです。

今、私たちはこの地上に置かれていますが、いつまでこの地上にあるのか、それはわかりません。しかし、確実にその時はやってきます。それに向かって、一步一步、神様の約束の言葉、幻を信じて、いつ何時、どういう事であろうとも、その約束にしっかりと信頼し続けていく。その信仰に神様は私たちを立たせて下さっているのです。ですから、「もしおそれれば待つておれ。それは必ず臨む。滞りはしない」。だから、常に待つ。主の時を待つ。神様のなさるわざを待つということです。私たちは神様との交わりを、い

よいよ深くしていく。いろいろな問題の中に置かれる時、悩みや悲しみ、苦しみの中に置かれる時、主が身近にご自身を現そうとして近づいて下さっている時なのです。そこでこそ、しっかりと神様に触れることができる。ヨブが目当たりに神様を見て、知って、そして、「あなたにはできないことはありません」と、全面的に神様に信頼する者へと変えられていく。私たちがもたまたま神様を知っている、私は信じていると言いながらも、いろいろな意味で、いろいろな事の中で、つい神様から離れている自分に気づきます。自分の力を誇り、自分のわざを誇り、また人を頼み、事情境遇、事柄を頼みとして、神様を忘れてしまう。神様はもっともご自身に密着した、近い者へと私たちを引き寄せようとして、あの事を起し、この事を起し、この問題の中に、と置いて下さる。先の木曜会でも教えられましたが、私たちの外なるものが失われ、弱くなり、自分の力は何も役に立たないことを徹底して知り尽くす時こそ、ますますはっきりと主がここにおられますと、主に触れる絶好の機会になっていくのです。だから、私たちは年と共に様々な機能を失いますが、その弱さを覚えつつも、そこで深く神様に入り込んでいく。神様の中に自分を委ね切っていく訓練の時、恵みの時であります。

3節に言われるように、「もしおそれれば待つておれ。それは必ず臨む。滞りはしない」。神様の約束のみわざは着々と進められているのですから、大丈夫、どんな事の中に置かれようとも、ここに神様

は私たちをご自分のものとして、永遠の御国の生涯に引き入れようと、訓練して、整え、きよめ、新しくして、力を与え、立たせようとして下さる。いつでも、どんな時でも、問題の中に置かれた時、ただ単にその問題の解決を求めるのではなく、その事柄を避けて通るのではなくて、むしろ、問題や事柄、悩みや患難と言われるものに、真正面からぶつかって、そこで自分の足らなさを知り、罪深さを知り、自分の中にある、自分の力を神とするような部分、まだまだ己を頼り、己の思いを握りしめて離れようとしないう自我というものとの戦いをそこで戦い抜いて、主の幻の結果、神様の最大の恵みを握る者、しっかりと受け止める者になっていきたい。これが私たちの信仰生活の最大の目標です。ただ単に地上の短い人生が事無く終ればいいというのではなくて、しっかりと神様を深く知り、神様の中に自分を取り込まれ、握られて、そしてすべてが主のものとなり切っていく。神様は私たちをそこまできよめ整えようとして下さる。その最終目標まで、神様は今なお絶えず熱心にそのわざを進めて下さいます。ですから、3節の後半に「**もしおそれれば待つておれ。それは必ず臨む。滞りはしない**」とあります。どんなに遅くても、必ず神様はそれを実現して下さる。ですから、新約聖書の「**ペテロの第二の手紙**」を開いておきたいと思います。

「**ペテロの第二の手紙**」3章8～10節を朗読。

9節に「ある人がおそいと思っているよ

うに、主は約束の実行をおそくしておられるのではない」。私たちの信仰は、ただ単に、この地上の平安や安きを求めるのではない。たとえ、それを求めたとしても、得られません。「これで安心」、「これでもう良し」、「これでもう悩みはない」と思っても、次から次へとこの世では悩みが多いのです。ですから、その事にとられる。ただそれを嫌な事として、マイナスの事として、それを避けて通るのではなくて、どんなことも神様が私たちに与えて下さる賜物です。悩みと苦しみの中を通して、私たちの心がこの世から、永遠の御国の民として、そこに望みを絶えず持ち続けていく者に造り変えられたいのです。これが私たちの求めるべきものです。

「ペテロの第二の手紙」が語られたのは初代教会の時代ですが、彼らもまたしかり。「**主イエスよ、すみやかに来たりたまえ**」と、主の来臨を待ち望みました。言うならば、主の終末の日が早く来て下さい。そうするならば、私たちの苦しみ、悩みの世から、永遠の御国に移される。最大の救いの完成の時がそこにあるからです。ですから、その当時の人々も、その事を望みとし、日々、苦しみに耐えました。初代教会は、様々な宗教的な弾圧や迫害に遭いました。その中で、常に望みとしていたのは何か。自分たちの人生はこの世で終るわけではなく、私たちは永遠の御国の民であること、そしてその信仰の最終目的が達成されるのは、再び主イエス・キリストがさばき主として地に来られる、終りの時であることを、彼

らは信じていました。ところが、現実には、なかなかそのことが実現しない。自分たちの信仰に対する迫害は、日増しに厳しく、苛酷なものになっていく。そうでありながら、イエス様は再び来るとおっしゃったが、いつ来てくれるのか。何も変わらないではないか。その事が3章にも語られています。

4節を読んでみたいと思います。「主の来臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変わってはいない」。ここに「主の来臨の約束はどうなったのか」と。一体、神様は救いを完成して下さると言うけれども、その約束はいつ完成するのか。そう多くの方は不満に思ったのです。それを聞いたペテロが語ったのが、8節以下です。「この一事を忘れてはならない。主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」。主の時、神様の定められた時が来なければ、それは起こらない。その時は人の考える時間とは違う。神様の時の中に一つ一つのわざが備えられ、導かれているのだ。9節に「ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである」。今なお最終的な終末のさばきの時が来ないのは、神様のあわれみであって、今暫く猶予しておられる。それはすべての人、一人でも多くの方がこの救いにあずかってほしいと。そうでなければ

永遠の滅びだからです。私たちもしかりです。イエス様の救いにあずかった私たちは御国の民として永遠を目指して、永遠の命の生涯に入れていただく。イエス様の所に戻っていく。イエス様が「あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから」(ヨハネ14:2)と。そこに私たちが迎えていただくための地上の旅路なのです。地上で受ける様々な出来事を通して、いよいよ自らがきよめられた者とされ、御国の民にふさわしく整えられることを、神様は願っておられるのです。

ですから、自分の信仰生活の目標をしっかりと握っていただきたい。いや、私はこの地上の生涯を終って、永遠の御国、主の御前に立たせて下さる時、恥じることなく、神様の前に、イエス様の前に「私は生涯あなたに従ってまいりました」「あなたの恵みの中に生かされてきました」と、心から主に感謝する者となる。そこに至るまで、なお、この地上に置かれて、主と同じ栄光の姿にまで変えられる。今なお、終りの時を目指して、神様はそのために着々と事を進めておって下さる。神様はなんと悠長なことをされるのか。速やかに、さっとすべてのものをさばかれたら、どんなに痛快かと思いますが、神様には神様の深い御思いがあり、ご愛がある。そのことが、ここに、「ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである」。主の忍耐があるのです。私た

ちはなおいろいろな問題、悩み、事に遭いますが、そこでいよいよ熱心に主を求め、主に交わり、主の御思いを自分の思いとし、みこころを行うことを努めて、御国に帰る時を待ち望んでいく者でありたいと思います。

「ヨハネの黙示録」の終りに、「主イエスよ、すみやかに来たりたまえ」と祈っています。私たちの祈りも、またしかりです。なお、この地上にあって、忍耐が求められます。しかし、なんとしても、主よ、すみやかに再び来て下さい。その終りの時を待ち望んで行こうではないか。私たちの向かうべき所が永遠の御国であることを知るならば、それをしっかりと見据えていきますならば、今、この地上にあって、今日どう生きるべきか。その歩みすらもはっきりとしてきます。また変わってくるに違いない。私たちは何を目指すのか。

もう一度、初めに戻ります。「この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそれれば待っておれ。それは必ず臨む。滞りはしない」。神様は約束の実行をおそくしておられるのではありません。必ず終りの時が突如としてやってきます。周囲の様々な日本の状況、世界の状況、次から次へと多くの人々が理不尽な死を迎えざるを得ない。また、天災で苦しみが増えていきます。これから良くなる傾向は何もありません。まさに滅びに向かって、終りに向かって、すべてのものが雪崩のごとく進んでいきます。多くの識

者は何とかしてそれをとどめようと、温暖化がどうであるとか、世界平和がどうであるとか、いろいろな協議をしますが、決してそれで終末が取り消されることはありません。天も地もすべてのものが終る時が来ます。何よりも私たちの地上の生涯が終る時が来るでしょう。そして、私たちはどうなるのか。私たちは永遠の御国の民として、主のみもとに携えられていく。その時、今の自分がそのまま主の前に立てるでしょうか。「主よ、私はあなたに従ってまいりました」と、はっきり確信を持ってみ前に立つことができるように、今というこの時、いろいろな問題に遭いますが、その中でこそ主に触れ、主のご愛と、主の力と、主の恵みをしっかりと自分のものとしていただき、また自らの心を主に向けて、主と一つとなっていきたいと思います。「もしおそれれば待っておれ。それは必ず臨む。滞りはしない」。決して滞ることはない。どうぞ、その終りに向かって、私たちもしっかりと地に足をつけて、神様の御心に従い抜いていきたいと思います。

ご一緒にお祈りいたしましょう。